

仏塔信仰

さて、さきに大乘仏教の直接的な源流とみなされるものとして

部派仏教からの発展

仏伝文学 讃仏乗の流れ

仏塔信仰

以上の三つが考えられるという説を紹介いたしました。

これらはいずれも重要ですが、とりわけ四信五品抄の内容と関連の深い仏塔信仰について取り上げてみましょう。そこで、今まで散説してきたことのくり返しにもなりますが、あえて塔婆の歴史を概観することとします。

塔（塔婆）の歴史と種々相

仏塔の塔は塔婆を省略した言い方で廟、方墳、塚、円塚を意味する「ストゥーパ」（サンスクリット *stūpa*・パーリ *thūva*）という語を音写して漢字にした言葉で率塔婆、率都婆とも訳されました。塔婆といえは木で作り大恩報謝や先祖のご回向、お彼岸などの時に建てるお塔婆が普通ですが、あのお塔婆だけが塔婆なのではありません。インド、中国、日本それぞれ素材も石であったり木であったり規模も大きなものも小さなものあり、形も様々です。

塔といえは金閣寺や銀閣寺など三重の塔、五重の塔、七重の塔を思い浮かべられるでしょうが、これらもお塔婆が日本的に変化したものです。ことに五重の塔とかお墓の五輪の塔は密教的な考えが元になって成立したものです。すなわちこの一身は地、水、火、風、空の五輪、五大によって成り立っているということからお墓にも当てはめられるようになったのです。ふつうお寺やお墓で建てるお塔婆にも切り込みが付いていますがこれはその名残りです。

「摩訶僧祇律」によると舍利のあるものを塔と名づけ、舍利のないものを支堤（枝

堤、制多、制底)と呼ぶと述べられてあります。支堤はサンスクリットのチャイトヤ (caitya) の訳で意識される場合は塔廟、霊廟、廟とされています。

仏様のご在世の頃に、すでに先立って亡くなった舎利弗と目連の二大弟子が亡くなった後に起塔供養をされています。

また、祇園長者が仏様が諸国を回って法を説かれている時は、そのお姿を拝むことができないのを寂しく思い何か仏様を思い出すものを頂いて、お敬いしたいとお願いをしたところ、仏様は爪と髪をお与えになりました。長者はその髪と爪を大切にしてお塔を建ててお敬いし供養したという故事が述べられていますが(十誦律)、これらが仏教の中で出てくる塔の最初ともいえるでしょう。もっとも後者の場合は塔といってもその中心は釈尊の爪や髪という聖物であったので後に現れる仏舎利(釈尊の遺骨)を祀った塔や仏教以前にもすでにあった墳墓としての性格をもった塔とは趣を異にします。

また、以前にふれましたように阿含經典の「大般涅槃經」では、まさに釈尊がご入滅されようとした時、仏様は御弟子の阿難に向かい「出家の弟子達は仏陀の舎利(遺骸)の供養はする必要はない。信心の厚いバラモンや居士の賢者達が如来の舎利供養をすであろう」と述べられている記述がありますが、釈尊の滅後、その亡骸を頂き供養したのはクシナガラ(ご入滅の地)の「マツラー人」であり、その他の在家信者達も争いまで起こして仏様のお骨を頂こうとし、ようやくドローナバラモンの調停で八つに分骨をして、各地で舎利塔を建てて遺骨を安置し供養礼拝をしました。

誰が分けて頂いたかは色々諸説がありますが、一説によるとクシナガラのマツラー族、パーバのマツラー族、ブラ族、ヴィシヌ島のバラモン、クラウディヤ族、リッチャヴィ族、シャカ族、マガダ国の大臣から阿闍世王(アジャータシャトル)に渡し、各々が故郷に持ち帰りました。

また、同じ大般涅槃經には仏の誕生地のルンビニーと成道の地ブッダガヤー、初転法輪の地サルナート、御入滅の地クシナガラに霊廟(チャイトヤ)が建てられ巡礼に訪

れる人が現れているということが書かれていることも述べました。

更に「阿育王伝」によればアショ-カ王は、仏滅の時に建立された八塔のうち、七塔を開いて仏舎利を更に細分してあらためて八万四千のストゥーパに分け安置したといわれ、現存の仏塔の中でクシナガラ、ヴァーシャーリー、バールフト、サーンチー、アマラーヴァティー、ソーパーラー、ダルマラージカーなどの塔は王の建立、又は増広（補強）したものです。

その後、西紀前後にも仏塔の建立は大変多く、信者のみでなく、出家教団の比丘、比丘尼も（男女の僧）礼拝し、供養に訪れました。後には、部派仏教（小乗仏教）の寺院の中にも仏塔が建てられるようになりました。

仏塔には、また釈尊が用いられたと信じられた衣などの資具を安置するためのものや、釈尊の事蹟を記念して建立された塔、仏蹟の巡礼者が功德を積むために奉獻した小塔などもあります。

次回に述べますが、法華経の中での塔婆にたいする教えは他のお経とは違う独自のもので、その教えに従って当宗ではお塔婆を建立しています。広い意味というより本来の意味でいえば、私達が拝んでいる上行所伝の御題目の御本尊を中心とした御戒壇も塔婆であり、ちょうどアショ-カ王が仏塔を建立することと仏法の弘通を同じに考えていたように、私達がお教化をして御戒壇をお祀りすることを勧めるのも同様の伝統に基づく行為であるといえます。およそ佛立宗ほど、御本尊の奉安にこだわり、御戒壇を荘厳に飾り立派にさせていたかどうかとする宗旨はありません。今日の私達のご信心のありかたは実に二千数百年以前の信者達の姿に源流を求めることができます。

仏塔は在家の信仰の形式

釈尊のご在世時代の故事にしても、ご入滅後の仏塔の建立にしてもこれは在俗の信者達が釈尊の信者指導に従って実行したものであり、以後も在家によって護持されて

きたもので、現在でもミャンマー（ビルマ）の仏塔（パゴダ）は信者が委員会を構成して経営に当たっているとのことでした。

部派仏教でもその教団の寺院の中に仏塔が建立されているけれども、これは外部で仏塔供養が盛んになったと取り入れられたものでパーリ上座部のたもっていたパーリ律の中には仏塔に関する記述がないのが証拠とされています。そのほかの有部（説一切有部という上座部系統の部派仏教の一派）の戒律である「十誦律」や大衆部の「摩訶僧祇律」では記述がありますが、これは律が固定したのが新しい時代で、そのときは既に教団の中で仏塔崇拜が取り入れられていたからです。仏塔供養は後に部派仏教にも取り入れられたものの完全に融合することはなく、仏塔は一種の独立的な存在となったと思われるのは、部派仏教の論書である「婆沙論」（つぶさには大毘婆沙論、五百阿羅漢等造といわれるように世有や妙音など多数の論師の説を引用する有部の論書で玄奘が訳した）や「俱舍論」（世親 ヴァスバンドゥが有部の教理を体系的に取り扱い批評をした書で、大乘、小乗を問わず珍重をされ日本に入るとこの書を拠り所として俱舍宗が成立した）には廟（caitya）に布施をしても果報は少ないとしているほか、多くの部派で仏塔に供養しても得る果は少ないと否定的に取り扱っているのです。なぜかというところ、仏法僧の三宝の分類に従うと、仏塔は仏宝に属しているのです。たとえそこに多くの施物が寄進されたとしても、出家の集団である僧伽のものとはならず、自由にこれを処分したり享受することはできなかつたのです。それで信者がこれらに寄進されたものを取り扱い処分の仕方を決めたのです。今でいえば、これは教務さんへと言って直接に僧宝にさし上げたものは別として御宝前に上げたものは仏宝に属するのでそのお下がりはどうにするかについて信者同士が話し合い分配するというとわかりやすいと思います。

そして、さらに仏塔の供養の方法として、華、香、幢（dhvaja 竿柱を高く上に突出した幡鉞をいい、その先に如意宝珠をつけたものを宝幢、如意幢といい、人頭のある幢を人頭幢と呼ぶ。仏、菩薩の法門の象徴とされる）、幡（pātaka 旌旗、八丈、莊

蔽の道具)、音楽、舞踊が用いられましたが、これらのことは戒律で禁止されている事項ですから出家仏教から仏塔供養は出てくる可能性はないこととなります。

(以上は平川彰博士著「インド仏教史」に詳しいので参照してください)

仏塔は大乗の根拠地

大乗仏教は本来、在家中心の教えですが、高度な教理と信仰が説かれており、その教理の発展の根拠地となったのが仏塔です。仏塔には寄進があるので次第に豊かになり、その管理者が必要となり、更に参拝者が多く出てくるとその管理者がもとは在家であっても段々に参拝者のガイド役ないし説明役を受けもつようになり、さらに教法の解説、研究まで行うようになり専門家として在家集団の指導に当たるようになったのです。

仏塔の建立には土地が必要であり、その土地には最初、仏塔が立てられたあとに、種々の施設、宿舎や井戸や池などが設けられ指導者の住む施設もできたのです。

紀野一義氏は「法華経の探求」を著して「訳経者の竺法護(239~316)がstūpaを訳すときに「塔寺」としたが、これは仏塔と仏塔管理者の住居の総称であるとして信者団が構成されていた」と見えています。そして、その中でも、進歩的な信仰心の強い一団が西紀前後から新経典結集という宗教文学運動を展開するようになったと見なしており、その運動の一つとして西北インドで成立したのが法華経結集菩薩団であるとしています。

また、高田修博士は現在も残っている伽藍(僧たちが住む僧院と仏塔からなる)の遺跡の配置図などから、平川説を否定して、発見される仏塔に残っている碑文は小乗の部派に寄進されたことを表わすものが多く、大乗に寄進されたことを示すものが現れないので大乗教団は存在しなかったとまでは言えないにしても、地下潜行の運動であったとしています。そして、ほとんどの伽藍は小乗仏教の部派のものでそこでは僧地と仏地が区別されており、しかも僧の住む僧院と仏塔は同時の建築であり後から仏

塔が僧院に導入されたとはいえないといっています。したがって大乘仏教に属する伽藍、寺院は存在しなかったと言っています。

しかし、平川博士はこれに対して、部派教団に奉献されないで、単に仏塔建立を示す碑文は部派の名前を出しているものより数倍多く、また、399年に長安を出発してインドに向かった法顕の「仏国記」と629年に出發した玄奘の「大唐西域記」を見るとインドの寺院の状況は殆ど合致していて大乘寺と大小兼学寺が全体の4割ほどあるとの記録があるので2、3世紀に建てられた仏塔のある寺院が全部小乗のものであるとは言えないとしておられます。

ともかく、仏塔を拠り所としていた在家の信者と非僧非俗の専門家たちが教団の如きものを構成していたのであり、後に大乘の經典に出てくる声聞僧伽（声聞とは仏の声を直接に聞く弟子という意味・部派仏教の出家達の集団 śrāvaka-saṃgha）に対抗する菩薩団（菩薩ガナ Bodhisattva-gaṇa）の母胎となったとみることも出来るのです。

いずれにしても、大乘仏教をになっていた人々がどのような状況であったかは推定に過ぎないのですが、仏塔との関係ははっきりしており、それがまた、釈尊の時代まで遡ることができる在家の信仰の姿から発していることは明らかどころです。

静谷正雄教授は「初期大乘仏教の成立過程」を著し、バールフト仏塔を中心に仏塔の信仰者の構成を調べ、寄進者の名前が明らかな碑文一一九の中で、寄進者の出家、在家、男女別などを調査、その中に三蔵に精通したもの、五ニカーヤ（阿含經の五部）の受持者、出家者の中に誦經者があることを明らかにして、仏塔の信仰者の知的レベルは低くないことを指摘しています。そして、仏塔教団の指導者は説法師（バーナカ）であったと推定し、後に大乘仏教の振興の担い手であった説法師と通ずるものとあると述べています。

法華經の中でも法師品という一章があり、仏滅後における法師の覚悟というべきことが述べられており、法華經の法の担い手もやはり法師であったことがはっきりしています。